

2020.8.30 年間第 22 主日

## 受難告知

マタイ福音書 16 章 21-27

(そのとき、) イエスは、御自分が必ずエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっている、と弟子たちに打ち明け始められた。すると、ペテロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた。「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません。」イエスは振り向いてペテロに言われた。「サタン、引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思っている。」それから、弟子たちに言われた。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを得る。人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があろうか。自分の命を買い戻すのに、どんな代価を支払えようか。人の子は、父の栄光に輝いて天使たちと共に来るが、そのとき、それぞれの行いに応じて報いるのである。

### 説教

福音書はイエスの「ことばと行い」を後代の教会の人たちが、イエスの受難のあと 10 年から 70 年後にまとめた聖書研究の結果わかっています。イエスは自分のことばを自分が書物として書き残すことはしませんでした。

福音書ではイエスのことばは「…」とカッコにくくられて表記され、地の文とはハッキリ区別しています。「…………、と弟子たちに打ち明け始められた (マタイ 16:21)」とマタイ福音書 16 章にある受難告知は注意深く表記方法を見れば、イエスの直接のことばとして記録されていないことがわかります。

これを受けてペテロがイエスに「そんなことはあってはいけません」とコメ

ントすると、イエスは「さがれサタン」とペテロを戒め、自分の十字架を背負って従え、という「自分の十字架」論を展開したと福音書は記録しています。

わたしはこうイメージしています。

- 1) イエスは預言を弟子たちに語った。
- 2) しかし、弟子たちはその内容が理解できなかった。
- 3) イエスの受難のあと、あのときのことばは受難告知だったのだと気づいた。
- 4) 自分の十字架を背負え云々（マタイ 16:24 以下）はこの「気づき」（あとからわかったこと）を受けて弟子たちが考えた「イエスのことば（仮）」、たぶんイエスはこのようなことをいていたのだという思い（推測）を福音書に記した。

**疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。**

（マタイ 11:28）

イエスはこのように穏やかに響くことばをわたしたちに残しています。自分の十字架を背負ってわたしについてこい（従え）はイエスのメッセージではなくキリスト教会のメッセージです。わたしたちはこの違いを聞き分けましょう。

やさしいだけのイエスでは物足りない、ときには叱ってほしいというもふつうの人間の気持ちです。イエスに厳しさを求めるならば、イエスの穏やかさの向こうにあるもの、善と悪をさばく神の厳しさを聞き取り、イエスが十字架の死をもって神とわたしたちの関係を修復してくださったことに想いをはせてください。

そのとき、イエスは語りかけてくれているかもしれません。

自分の十字架の重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。

-----